キャリア意思決定についての認知が 就職活動方針とキャリア探索行動に与える影響

小菅清香

(学習院大学大学院人文科学研究科)

キーワード: ゴール選択, キャリア選択に対する自己効力, 意思決定に対する困難さ

The effects of Career Decision-Making Self-Efficacy and Career Decision-Making Difficulties on goal selection and Career Exploration

Sayaka KOSUGE

(Graduate School of Humanities, Gakushuin Univ.)

Key Words: goal selection, career decision-making belief, career exploration

目 的

新卒採用活動のスケジュールは各社横並びであるため, ある時期に適切な活動をしていなければ, その後の就職活動において不利になると考えられている(濱中, 2007)。そのため, 就職活動を扱った研究において, 活動内容と共に特に重視されたのは, 就職活動のタイミングと量であった。キャリア領域での主な研究として, 自己効力研究や意思決定研究があるが, 前者は行動の生起と持続, 後者は合理的な意思決定を理想とするものである。したがって, 出来る限り早い段階で, 合理的な意思決定と積極的な活動がなされることを目的とし研究が発展してきたといえよう。

では, 被支援者側である学生は, どのような就職活動が望ましいと考えているのだろうか。従来, 大学生の職業に対する態度や意識は, どのような就業が望ましいかという高次のゴールを扱う研究がなされてきたが, 就職活動自体におけるゴールを扱った研究はあまりない。

したがって本研究では, 就職活動で何を重視するかという個人の活動方針に焦点をあてて検討を行う。就職活動開始前に測定された CDMSE と就職活動時のキャリア意思決定の困難さという認知と, 就職活動方針の関連について検討し, それら変数がキャリア探索行動に与える影響について縦断的アプローチにより検討する。

方 法

1. 調査時期および内容

第1回調査 2012年7月 ①CDMSE: 安達(2001)が Taylor & Betz (1983)を参照し作成した測定であり, 進路選択・課題解決・計画立案・自己評価・職業情報収集に関する自己効力についての各7項目, 計35項目。

第2回調査 2012年12月 ②進路意思決定の困難さ: 若松(2001)により作成された, 大学生が進路意思決定において抱える困難さを測定する尺度。志向する進路の模索・能力面の不安・進路先の実情への不安・現在の自分の状況との葛藤・進路選択の方法についての戸惑いという5つの因子からなる, 計38項目。

第3回調査 2013年4月 ③就職活動方針: 内定獲得者に対するインタビューをもとに筆者が作成した。活動量重視・内定数重視・条件重視についての各3項目, 計9項目。④キャリア探索行動: Stumpf et al. (1983)を参照しながら, 低学年にも適用可能なかたちに安達(2008)が作成した尺度。“自分という人間について考えてみる”などの自己探索行動6項目, “興味がある仕事に関する情報を集める”などの環境探索行動7項目, 計13項目。

2. 調査対象

全ての調査に参加し, 進路希望を就職としていた, 関東圏内の私立大学の大学3年生, 男性18名女性36名の計54名(平均年齢は20.93歳, SD=.77)を分析対象とした。授業時間を利用した一斉調査を実施した。

結 果

CDMSE, 意思決定の困難さについては, 因子間相関の高さから1因子構造を採用した。「CDMSE・意思決定の困難さ→就職活動方針→キャリア探索行動」とする因果モデルを仮定し, 重回帰分析を行った結果が Figure1 である。CDMSE から内定数重視へ-.35 ($p<.05$), 意思決定の困難さから条件へ-.36 ($p<.01$), 活動量重視から自己探索へ.32 ($p<.05$), 内定数重視から自己探索へ-.34 ($p<.05$), 条件重視から環境探索への直接的なパスが認められた (-.32 ($p<.05$))。

注: 有意なパスのみ描いてある。

* $p<.01$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Figure1 CDMSE, 進路意思決定の困難さ, 就職活動方針, キャリア探索行動の関連

考 察

学生の就職活動における就職活動方針は多様であった。因果モデルを分析した結果, CDMSE が低いほど内定数重視の方針を採用し, 意思決定の困難さが低いほど, 条件重視の方針を採用するという結果が示された。したがって, 学生は認知の持ち方によって異なる就職活動方針を採用しているといえる。また, 就職活動方針については, 活動量を重視するほど自己探索行動は増加するのに対し, 内定数, 条件を重視するほどキャリア探索行動が減少することから, 個人の就職活動方針は単純な活動量の増加には反映していないことが示された。